

環境配慮を巡る地域内外の環境価値のズレ：世代間の公平性の視点
 Deviation of the environmental value of the region and beyond over the environmental considerations

田代 優秋¹・中村 俊之²・森本 友之³
 TASHIRO Yushu・NAKAMURA Toshiyuki・MORIMOTO Tomoyuki

1. はじめに

農業農村整備事業における環境配慮の義務化によって、多くの成功事例の獲得の一方でいくつかの「うまくいかない事例」がみられるようになった。その理由に対して、維持管理の省力化や環境保全工法など、土木工学的・生態工学的・保全生態学的な技術で解決しようとする方法（以下、技術解）が多く取られてきた。また、関係者間の合意形成や再文脈化（共通的な価値を地域の考えに沿うものへと変容・読み替えること）など社会的に解決する方法（以下、社会解）の重要性も認知されている。さらに、事例の個別分析から、少なくない同種の事例を俯瞰的にみて問題を構造的に捉える試みもある（田代 2013；田代 2014）。こうしたよりよい農業農村整備事業を目指して、本報告では、ほ場整備事業を巡ってみられた地域内外の価値観のズレを取り上げ、技術解や社会解に加えて「世代間の公平性」という視点を追加したい。

2. 対象事例の概要

県営ほ場整備事業予定地でみつかった石積み水路の保全である。徳島県阿南市長生町大原地区において、兩岸の空石積みに加えて、水路床も同様の石張りが施された水路（以下、石積み三面張り水路）が確認されたことを端緒とする（図 1）。大原地区は、1 級河川那賀川の支流桑野川と、無堤防河川である大津田川に囲まれた洪水常襲地域である。その一方で、夏季には水不足も起こす水稻栽培に苦勞する地域である。このため、1997 年頃から県営ほ場整備事業が計画されたが、桑野川の引堤工事や治水上の内部調整の結果やや遅れたものの 2013 年度から工事が着工された。石積み三面張り水路は保全対象として扱われることなく、2014 年に撤去され、柵渠水路に改修された。



図 1 石積み三面張り水路。河川接合部は河川護岸と一体的に整備されている

- 1 公益財団法人 公害地域再生センター The Aozora Foundation
- 2 有限会社 ウェットランド研究所 Wetland Laboratory Co.,Ltd.
- 3 徳島県土地改良事業団体連合会 Tokushima Federation of Land Improvement Association

Keyword 環境配慮、世代間の公平性、価値観、石積み水路

3. 石積み三面張り水路の地域内外の価値判断

事業実施上の環境配慮義務から、調査・検討が行われた。県下では類例のない珍しい水路であったことから、地域外部者（研究者・専門家ら）によって魚介類・植物からみた生態学的評価および造られた経緯などからみた地域資源的評価が行われた。

(1) **生態学的評価**：調査は石積み三面張り水路を含め大原地区全体を網羅的に、魚介類と植物について実施した。捕獲された魚類は16種、合計644個体であった。このうち三日月湖を除いて、石積み三面張り水路で最も種数が多く（7種）、ここでのみウナギが採集された。水生植物についても、オグラコウホネやアイノコヒルムシロがこの水路に特異的に確認された。

(2) **地域資源的評価**：石積み三面張り水路の築造経緯については、地元土地改良区（理事長、副理事長）に聞き取り調査を行った。この結果、地域の農業史を知る上で重要な過程を経て形成されたものであることがわかった。具体的には「昔は隣の南岸土地改良区から川を樋で渡してまで用水をもらっていた。それでもしばしば水不足になった。昭和23～25年ころ、地区の下流側にある桑野川から取水することにした。水の流れが逆になって水路が流れなくなった。今の石積み三面張り水路が取水口だったが、今度は排水口になった。それでは排水できないので、昭和37、8年ころに水路を掘り下げた。その時に、崩れないようにするためと、最末端排水路なので草などが生えて通水を阻害しないように石を張った。この時の賦課金が大きく償還するのに14～15年もかかった」と述べていた。この取水源を変更したことで、流れが逆になったことが郷土史等でも確認でき、また川を越えて水を引いていた様子が空中写真からも把握できた（図2）。農業が困難地域において比較的新しい時代の土木工事であっても、地域活性化などに使える地域資源としても、地域アイデンティティとしても重要であろう。

(3) **地域の農家の評価**：石積み三面張り水路の保全が地元農家に提案された。聞き取り調査時に「工事ですべてしてしまうのはもったいない」とも聞かれたが、「戦後にみなで作ったもので土木遺産のような価値はない」「（排水上、もっと大きな水路が必要で）他集落に水害が発生したときに補償問題になる」など、地域住民は様々な価値観の中でバランスを取りながら保全を選択しなかった。

4. 価値観のズレを埋める世代間公平性の視点

地域の内外（地域の農家と専門家）では、同じもの（ここでは石積み三面張り水路）に対しても評価が異なった。価値観の優劣は無用な諍いを生じさせ、避けなければならない。こうした事例では、他者の価値観を尊重した合意形成が取られるが、それはしばしば内部の合意で済まされる。しかし、こうした内外での差異には対処することが難しく、他方が妥協する以外にないのが現状であろう。こうした場合に、現在世代で拮抗する価値で結論を出さずに、地域を担う将来世代が、両方の価値観を比較して選択できるようにするという考え方ができる。

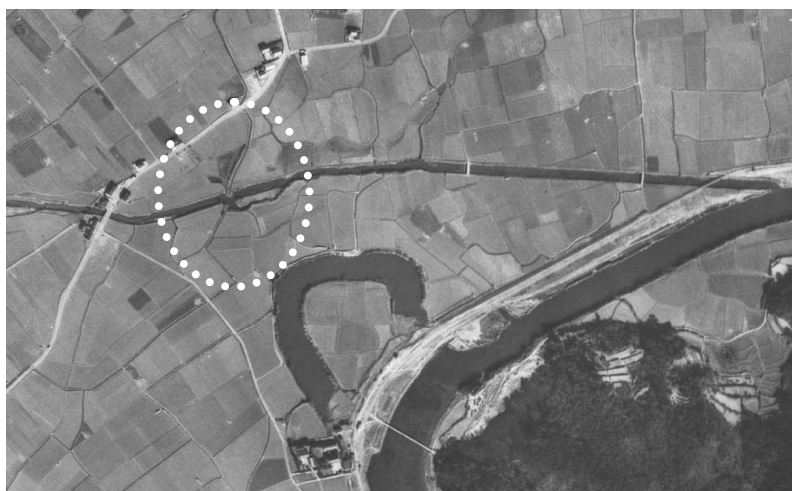


図2 川に樋を渡して用水を供給していた様子
(1953/2/10撮影)。

補足：本報告では事業の是非や農家の判断を批判するものではなく、事業主体と設計者の間に想定された差異を論じたものである。